

2022年2月12日

T.Kobayashi

検見川を歩いて見る その2 千葉街道(房総往還)を歩く

11月に検見川の海岸段丘を歩いて見たら、今度は段丘の下つまり旧千葉街道を歩いてみたくなった。2月7日、穏やかな陽差しの午後、京成検見川駅近くの駐車場に車を停めて、歩き始めた。

<1>旧千葉街道入口

本日の旅の起点を花見川西岸の幕張町五丁目にある、「新旧街道の分岐点」と定めた。検見川村に入っていく旧街道が分岐する交差点は、国土地理院の地形図によれば海拔5.8m。ここから北に1.5Kmほど進み旧武石村に入ると海拔20~25mの高さになる。緩やかな傾斜のこの辺りは花見川の河口に広がる扇状地だったのかもしれない。

<2>花見川を渡る

新花見川橋という味も素っ気もない名の橋が幕張と検見川を結んでいる。昭和5年の松井天山の写生画を見ると「花見川橋」と書かれているので、新花見川橋という名も致し方ないのか。

南東(千葉方面)に向かって橋を渡り始めると、左手の京成電鉄と総武線の鉄橋の上を電車が走るのが見えた。

橋の上から岸辺の景色を見ると、検見川側の岸辺にマンションや一戸建ての住宅が並ぶ不自然な形をした平地を発見。地図を出してじっくり調べてみると、総武線と京成線の間広がる三角形の清水代公園(しみずしろこうえん)から下流に向かって花見川の中洲だったと思われるような形をしている。古地図で見ると河幅が今より広がっているようで、恐らくここは川の中だったのかもしれない。あるいは浚渫土を盛り上げて埋立地を作ったとも考えられる。

花見川の東岸(検見川側)にあるにもかかわらず、この平地は幕張町となっている。

<3>検見川神社入口

住宅地の中を進むと検見川神社南交差点。左に曲がれば検見川神社の鳥居が近い。交差点は海拔3.7mだが200mほど北側にある検見川神社は13mの小山になっている。古代には河口の入江だったことを感じさせる地形になっている。

<4>旧千葉街道に入る

交差点を右折して南に向かうのが旧千葉街道。道の両側の家並みに注視すると、純木造の古い家が目立つようになり、思わず足を止めたくなるようなお店が現われる。

角にあるのは河内屋という和菓子屋、創業は江戸時代の享和年間(1800年代初期)という。検見川最中と梅どら焼きを土産に買って帰った。検見川最中には栗が入っていたが、何故なのかわからない。千葉方面に向かって進むと石材屋があり、肉屋があり、酒屋がある。その酒屋の名前が「半七酒店」だからたまらない。何かありそうな気がしてワクワクしてくる。

半七酒店は創業者の名前が半七さんだったのだろうか。岡本綺堂の「江戸の岡っ引き半七」を想像してしまうが、街道沿いの酒屋へ近所のおかみさんが徳利をぶら下げて買いに来る姿を思い浮かべる。

そして瀬戸物屋があり、その隣が「十一屋商店」。生活臭のある古そうな店が並び、街道沿いで人々が暮らしを立てていたことを感じさせる。

十一屋という屋号の店は各地に存在するが、「村で十一番目の金持ちだった」とか「十一(といち)の金融業をしていた」とか諸説ある。この店の方に聞いてみないとわからない。

左手に検見川公民館前の道祖神がある小山が見え、そこから街道と並行するように点々と木々の緑が繋がって見える。これが海岸段丘の絶壁だ。

<5> 厄除不動尊

十一屋商店の対面に建つ民家の塀が50cm角にえぐれていて、そこに「厄除不動尊」と書かれた石柱が建っている。前後左右を見渡してもお不動様は見あたらないし、検見川神社をすでに通り過ぎていたので検見川神社への標とは考えにくい。

石柱の左面には「小中台村 日永寺」と、右面には「天保十二年秋九月 吉祥?? 金生堂東橋書 石工??」と刻まれている。刻字は上の方は読み取ることができたが、下の方と背面は全く判読出来ない状況だった。ことよると「日永寺への里程」が示されていたのかもしれない。

真言宗豊山派法螺山日永寺は、鎌倉時代に創建され今も小中台町にある。

家と家の間に細い通路があって、その路地の奥に段丘の壁がうかがえる。すぐそばに海の音が聞こえた時代を想像しながら歩くのも愉快だ。

<6> 子安観音堂

民家と民家の間の路地に入って崖の景色や家並みを楽しんでいたら、敷地の一角に宮大工が作ったとは思えぬような小さな祠が見えた。恐る恐る一步踏み込んで見たら「子安観音堂」と書いてあり、その横に不規則な形をした石板に刻まれた碑文があった。風化により判読が難しいところもあったが、腰を屈めて不自然な体勢で何とか読み取って見たら、こんなことが書いてあった。(現代文に訳)

「二百有余年前に、この地に子安観世音があったが、御安体の地なく再度の移転が続き苦心が続いた。

昭和9年良月吉日をもって、ここに安置することになった・・・・・・・・・・。尊き観世音を永久に御守護あらんことを望む」そして下段に法願世話人として宮間きんほか6名の名が刻まれている。

観音堂の近くには「宮間コーポ」があり、前述の十一屋の隣には「宮間陶器店」がある。宮間さんという方はこの地の実力者だったのだろうか。

すぐそばの角を曲がって崖を上っていく道の途中には、先月発見した不思議な子安観音堂が建っているので、何らかの関係があることと思われる。

<7> 海岸線に連なる崖

検見川町三丁目あたりから、街道の左手に盛上がった崖のような連なりが始まる。崖は稲毛自動車教習所の先まで続く。前記の検見川町鳥瞰図(松井天山画)によると、千葉街道は崖の下を歩き、街道沿いに集落が耐えることなく連なっていて、崖の上には「住宅地分譲」と書き込みがある。

現在の地図を見ても地形の起伏はあまりわからないが、古い地図を見ると海岸の段丘地の地形が明瞭にわかる。古代に遡れば、おそらくこの崖が海岸線で、検見川神社の前も千葉街道旧道も海だったのかもしれない。

要所に崖を上がる切り通しの坂道があり、丘の上と海岸線をつないでいた。現在では崖を背にするぎりぎりの位置にまで民家が建っており、これらの家の中には崖の上の道路から三階に入る玄関を持っている家や、玄関を上下に二カ所持つ家もあるようだ。

<8> 三峯神社

前方に検見川陸橋が見えるようになると、旧千葉街道は一世代前の旧千葉街道に吸い込まれるように合流する。合流地点の先に三峯神社と刻まれた石の標識が建ち、民家の間に細い路地が筋を引くように走っている。標識の前にあるバス停の停留所名を示す丸い板をのぞいて見たら「階段下」となっていたので、一人で吹き出してしまった。

路地の奥の階段を62段上ると一対の狛犬(お犬様)が出迎えてくれ、三峯神社の境内に入る。

急勾配の階段の上から見下ろすと、目の前に広がる袖ヶ浦の海を思い浮かべることが出来る。
検見川神社の境内末社である三峯大神の分身を祀っているようだ。いつもながら、箒目の入った境内には荘厳さも漂う。張り出した古木の根や巨木の傾きにも靈気が感じられる。
ここから住宅地の中を通り抜けて、出発地点の京成検見川駅前に戻った。

次には、旧海岸線を探し歩いてみたいという新しい興味が湧いてきた。

「検見川の寺社巡り」に始まった「検見川を歩いて見る」という計画はどんどんエスカレートしてきて、「幕張の寺社巡り」が棚に上がったままになってきた。

以上



◆関連文書

検見川を歩いて見る ～検見川の寺社巡り～

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/kemigawa.pdf>